

山と博物館

第51巻 第11号 2006年11月25日

市立大町山岳博物館

山岳博物館創立55周年記念特集号(前)



開館当初の山岳博物館。建物は初代(1951~1957)のものです

創立五十五周年を迎えて

柳澤 昭夫

わが国で初めて「北アルプスの自然と登山」をテーマにして、大町山岳博物館が誕生してから五十五周年を迎えました。

ライチョウやカモシカの生息調査と飼育研究、高瀬川流域総合調査、近年では絶滅が危惧される植物の生活史の研究等様々な調査研究に取り組みとともに、その成果を展示や教育活動の展開に活用してきました。五十五周年を振り返って博物館が掲げたテーマをどれだけ具体化し、掘り下げ教育活動として展開することができたでしょうか。

人は誰もが生涯学び続けなければなりません。いま、博物館には社会教育機能の充実が求められています。確かな教育活動の構成に基づき、調査研究を行い、資料を収集し、解析し、評価し、位置づけ、展示を構築し、山岳博物館らしい特色ある展開をしたいと考えています。

山岳文化都市宣言をした大町市は、環境にやさしい街づくりを目指しています。

いま、CO₂の増加と温室効果による地球規模の温暖化、水循環の異常、オゾンホールの拡大、化学物質による環境汚染などは、私たちの時代を超えて負の遺産として未来に引き継がれようとしています。自然と共生する道を、自然と人とのかわりを学びながら、探していくこともこれからの博物館の課題です。五十五周年を振り返りながら、こうした新たな課題を含め、みなさんとともに博物館は歩んで行くつもりです。

(市立大町山岳博物館館長)

(山岳博物館創立五十五周年記念 企画展

「博物館のあゆみ」展示解説より)

山岳博物館創立五十五周年記念 博物館のあゆみ

(前)

市立大町山岳博物館

はじめに

戦後の混乱が続く昭和二十四年ころ、まれに見るこの山岳環境と独自の地方文化を見つめ直し、その発展の拠点を求める青年たちが立ち上がりました。それが山岳博物館のはじまりでした。

ここでは、平成十八年十月二十八日から十一月十日まで市立大町山岳博物館で開催した山岳博物館創立五十五周年記念 企画展「博物館のあゆみ」の展示解説をもとに博物館の過去・現在・未来についてご紹介します。

1、開館までのあゆみ

一九七四年（昭和二十二年）五月三日、新しい日本国憲法施行の日、町立大町図書館は公民館として発足しました。当時青年団を主体とした若者たちは、終戦直後の混沌とした社会情勢の中で公民館建設に新しい夢を託して

立ち上がりつつありました。

この日催された講演会で一志茂樹氏は、「新しい地方文化向上のためには郷土の特殊性を生かし、私たちは北アルプスの大自然をもう一度見直さなければならぬ」と述べ、青年たちを大いに感激させました。

この十月に発表された青年たちの公民館運営の構想の中に公民館郷土部の設置がありこの頃から青年たちは、郷土文化を興隆するためには、町の立地条件から山岳博物館の設置こそが最重要課題であると結論し、それが郷土部の掲げた最高の目標でした。郷土部の青年たちはこの構想に基づいて具体的な行動に移りました。

それから五年後の昭和二十六年十一月一日、青年たちの熱意は日本で最初の山岳博物館を誕生させたのでした。（山岳博物館の開館までの経緯は「山と博物館」十周年記念号に収録されています。）

2、調査・研究

居谷里湿原総合学術調査

一九五六年（昭和三十一年）四月一日、北アルプス一帯を野外博物館として開設することを目指し、北アルプス一帯の基礎調査の五年計画が立案されました。

その予備調査として「居谷里湿原総合学術調査」が開始されました。調査には、地元の研究者や館の職員が参加し、調査項目は、地質、土壌、気象、動物、植物と多岐にわたる年間約六〇〇人以上を動員し、収集資料は二六〇〇点あまりにも達し、一九六〇年（昭和三十五年）に「山岳博物館研究報告第一号」として発行されました。

後に居谷里湿原は一九七一年（昭和四十六年）、長野県の天然記念物に指定され、現在に至っています。

針ノ木自然園構想

一九五五年（昭和三十）、羽田健三氏により針ノ木一帯を自然園とする構想が打ち出されたこれにともない、一九五七年（昭和三十一年）には、厚生省・文部省の意見を聞きなが

ら、同時に市観光課と連携を図り、市の総合的観光開発のひとつとしての具体化が試みられました。

そして一九五八年（昭和三十三年）、信州大学教育学部生物学教室協力のもと、本格的な調査が開始され、翌年にはその成果を「針ノ木岳一自然とその保護」として発表しました。

しかし、その後この針ノ木自然園構想について実現化されることはありませんでした。

黒部川上流地域雨量観測

一九五六年（昭和三十一年）、関西電力による黒部川上流開発計画（黒四ダム建設）にともない、南沢岳、三ツ岳、野口五郎岳、水晶岳、赤岳、針ノ木谷、平ノ小屋、関西電力第四調査所、御山谷、五色ヶ原、刈安峠、スゴの小屋、三俣蓮華岳、赤牛岳、雲ノ平、黒部五郎岳、北ノ俣、太郎山、薬師岳に雨量計の設置や定期的にデータ回収の協力を行いました。

当時山岳気象の観測は断片的なものに限られていたことから、長期的かつ連続的なデータの収集という試みは大変意義深いと同時に、労力的にまた体力的にも非常に苦労が多かったことと思われれます。

コマクサの低地栽培

一九六〇年（昭和三十五年）、長野県の委託事業により「コマクサの保護栽培に関する研究」として五年計画で研究が始まりました。その間、高山帯での生育地の特徴の解析とともに本館庭につくられたロックガーデン（のちのコマクサ園）で栽培試験を行い形態的特徴などについて明らかにし、「長野県生薬試験研究所研究報告（一九五三年）一九六一年」



居谷里湿原総合学術調査



針ノ木岳総合調査



黒部川上流地域雨量観測



コマクサ園



高瀬川流域総合調査



里山の甲虫調査



オオハクチョウ



イヌワシ



コバクチョウ



成長した岳子

で発表しました。

また、二〇〇三（平成十五）～二〇〇五年（平成十七）には、高山帯やコマクサ園で生
活史やマルハナバチが専門に花粉を送受粉す
ること、アリの種子散布に関わることを明ら
かにし「長野県植物研究会誌三九（二〇〇六）
」で発表しました。

高瀬川流域総合調査

一九七八年（昭和五十三）、電源開発工事
が終了し、高瀬川・七倉両ダムの貯水がはじ
まりました。

大町市議会では、議員で構成した「高瀬川
ダム開発対策委員会」において、貯水後の自
然環境の変化とその影響及び自然の修復能力
などの諸問題が真剣に討議され、追跡調査の
必要性が訴えられました。

調査は大町市に委託され、調査団事務局が
博物館に設置されました。

一九八一年（昭和五十六）、調査を終了さ
せた調査団は三五〇ページにも及ぶ「高瀬川
流域自然総合追跡調査報告書」を提出しまし
た。

大町市における高山蝶—特にミヤマモンキ チョウについて—（二〇〇二～）

ミヤマモンキチョウは環境省レッドリスト、
長野県版レッドリストでは準絶滅危惧種（N
T）に指定されています。

大町市は北アルプスにおける本種分布の北
限にあたる地域で、一九五〇年代までは多く
観察されていましたが、近年は観察記録が少
なくなってきました。

そこで、本種の保護と生息環境の保護・保
全を考えるためにも調査活動を行っています。

大町市におけるクロツバメシジミの生息状 況調査（二〇〇二～）

クロツバメシジミは大町市において河川敷
を中心に広く生息しています。本種の生息地
は、人為や植生遷移による環境変化を受けや
すく、個体数変動が大きいことから、年間を
通して環境を含めた生息状況を継続的に調査
しています。

里山の甲虫調査（二〇〇四～）

カプトムシ・クワガタムシを捕獲し、印を

つけて放し、再び捕獲することにより、生息
環境を把握する基礎データを収集すること
を目的とした調査を長野県環境保全研究所、山
岳博物館友の会とともに探険クラブと共同で実
施しています。

また市立大町北小学校は総合学習やクラブ
活動として参加しています。

今までのべ三〇〇〇個体のマーキング調査
を行いました。

安曇地方の絶滅危惧植物の生活史（二〇〇二 ～）

二〇〇二年（平成十二）、「長野県版レッド
データブック」の刊行に先がけ、安曇地方の
植物を対象に種子から開花に至るまでの生活
史や花の特性、生物との関わりについて、観
察をはじめました。

対象とした種は、フクジュソウ、サクラソ
ウ、ササユリ、ビッチュウフウロ、イヤリト
リカブト、アズミノヘラオモダカなどとし、
二〇〇六年（平成十八）には、それらの成果
に基づき七月二十二日～十月九日の間、企画
展「くさばなの一生—日本の草本と外来草本
の生活史—その営みとそにせまる」を開

催しました。

また、研究が終わったものについては順次
「長野県植物研究会誌三七及び三八」で、「長
野県絶滅危惧—B類ビッチュウフウロの生活
史および開花特性」、「長野県準絶滅危惧サ
ユリの生活史および訪花昆虫」として発表し
ました。

大町周辺の山人たちの活動と近代登山黎明 への影響（二〇〇三～）

遠山品右衛門、上條嘉門次、小林喜作ら北
アルプスの山人について、彼らが使った道具
など関係資料の所在を確認するとともに、二
次資料を収集しました。主に文献上で見られ
る関係記述を個別に拾いあげてまとめました。
これをもとに前記の生涯や当時の登山史上で
の出来事などを盛り込んだ年表を作成し、二
〇〇七年（平成十九）一月二十七日～三月二
十五日の間、企画展「北アルプス山人たちの
系譜」と題して、開催いたします。

3、飼育動物とエピソード

信濃大町の白鳥

一九四九年（昭和二十四）一月十七日、青
木湖に二十七羽のオオハクチョウが飛来し、
うち三羽（オス二、メス一）が猟師により撃
ち落とされました。二十二日、社村（現 社地
区）で、一羽のオオハクチョウのメスが舞い
降り、捕獲されました。オオハクチョウは雌
雄の間の愛情がとても強く、メスは先に撃た
れたどちらかのオスのパートナーで、オスを
探し、力果てて高瀬川のほとりに降り立った
のであろうと、「白鳥物語」の著者羽田健三
氏は記しています。

その後、大町南高校での飼育を経て、大町駅前には水禽舎が建設され、ハクチョウが飼育されるようになりました。

オオハクチョウのその後社村で捕獲されたオオハクチョウのメスはその後、駅前の水禽舎で飼育され、十一年間の生涯を閉じた後、先に打ち落とされて剥製となっていたパートナーのオスと、再び博物館で巡り合い、つがいでとして展示されました。

イヌワシ

一九五一年（昭和二十六）、オスのイヌワシが保護されました。これが博物館でのイヌワシ飼育の始まりです。以降、博物館では4羽のイヌワシの飼育を手がけてきました。

一九九四年（平成六）大町市内の路上で幼鳥のイヌワシ（メス）が衰弱してうずくまっていたところを保護しました。一九九八年（平成十）に八木山動物園（宮城県）よりオス1羽を借り受け、繁殖を試みました。しかし、二〇〇〇年（平成十二）八月二十日、内臓真菌症によりメスが死亡してしまいました。解剖から卵巣の発育不良であったことが判明し、もともと繁殖ができなかったことが解りました。

イヌワシは現在、環境省の絶滅危惧ⅠB類（EN）に指定され、絶滅が危惧されています。

木崎湖水禽舎のコブハクチョウ

一九六二年（昭和三七）一月二十三日、木崎湖に一羽のオオハクチョウが十一年ぶりに飛来しました。地元海ノ口地区の公民館や博物館では、さっそく、保護運動に乗り出し、三月三十日に「白鳥保護打合せ会」が開かれました。翌日、オオハクチョウは飛び去って

しまいました。かねてより皇居のお堀からコブハクチョウを移入するとの話もあり「白鳥を浮かべる会」が発足しました。

そして、一九六三年（昭和三八）三月二十七日早朝、木崎湖の北岸の池（白鳥の池）に一つがいのコブハクチョウがやってきました。

以来、コブハクチョウの飼育は白鳥の池の後駅前水禽舎へと移り、平成八年まで行われました。

ニホンカモシカ

はじめての飼育「岳子」

一九五六年（昭和三十）二月二日、南安曇郡安曇村（現松本市安曇）にて、生後約九ヶ月の「岳子」が保護されました。

エサに困って鉢盛山（二二四六m）から里山近くに下りてきたらしく、空腹と疲労のため、かなり衰弱していました。飼育という初めての試みに、東京上野動物園飼育課から飼育方法などのアドバイスを受け、体調を回復した「岳子」は飼育下で二十一年の生涯を閉じるまで地域住民のみなさんにかわいがっていただきました。

当時ニホンカモシカを飼育していたのは東京上野動物園、名古屋東山動物園、そして山岳博物館の三ヶ所でした。

世界初!! 人工ほ育に成功

一九六五年（昭和四十）六月九日、真田町（長野県）でまだ幼いオスの「大助」が保護されました。

当時はまだ授乳期のニホンカモシカの育て方が確立されておらず、人工ほ育はまったくの手探り状態でのスタートとなりました。そ

して、成獣まで育て上げたこの事例は、世界で初めての快挙となりました。

一九七〇年（昭和四十五）、大助は「あつ子」との間に「太郎」をもうけます。これが山岳博物館での初めての繁殖です。そして太郎は後に日中国交回復の記念に中国から贈られたパンダの返礼として北京動物園へ贈られました。

カモシカを中国へ

一九七三年（昭和四十八）、日中友好のきずなとして山岳博物館から一つがいのニホンカモシカが北京動物園に贈られることになりました。

当初、「木曾生」と「町子」が贈られることになっていましたが、木曾生が人為と思われる右目眼底骨に達する刺傷を負ってしまったことから、急遽「太郎」と「辰子」とになりました。その後、太郎は一九九一年（平成三）に生涯を閉じましたが、その間、辰子との間に十二頭の仔をもうけました。（辰子の死亡日は不明）

パンダがやってきた

一九八一年（昭和五十六）、全国の巡回展に先駆け上野動物園よりジャイアントパンダ「ランラン」の剥製が山岳博物館へやってきました。

ランランはオスのカンカンとともに日中国交回復を記念して中国から日本へやってきたもので、その返礼として贈られたのが、当時山岳博物館で飼育していた「太郎」と「辰子」でした。初の巡回展が大町市で行われたことには、そのような経緯があったのです。

そして一九八二年（昭和五十七）、博物館（三

代目）の開館を記念してこんどは剥製となったオスのカンカンもやってきました。

カモシカをオーストリアへ

一九八四年（昭和五十九）、インスブルック市（オーストリア）アルペン動物園からニホンカモシカを飼育したいとの要望を受け、山岳博物館からオスの「大」とメスの「博美」を贈ることになりました。しかし、輸送中、博美が死亡したことから、妹の「博子」が後に贈られました。

このカモシカの贈呈を通して、インスブルック市と大町市、アルペン動物園と山岳博物館は一九八五年（昭和六十）に友好提携を結び、その後、オーストリアからアルプスマーモット、オオライチョウ、シヤモア、シペリアオオヤマネコが博物館にやってきました。（次号へつづく）

付属園だより

平成十八年十月十八日、大町山岳博物館では、付属園で生まれ育ったニホンカモシカ（メス、平成十六年五月三十一日生、愛称「わかば」）を東京都大島公園（東京都大島町）へ譲り渡しました。これは大島公園からの依頼によるもので、ニホンカモシカの種の保存と増殖および調査研究を目的としています。

山と博物館 第51巻 第11号

発行 二〇〇六年十一月二十五日発行
〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六-二二二〇二二

FAX 〇二六-二二二二二二

E-mail: sanpak@city.omachi.nagano.jp

URL: <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpak/>

印刷 株 奥村印刷

定価 年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）

郵便振替口座番号 〇五〇四 〇七一 三三九三